

公共放送のスポーツ放送時間推移にみるスポーツの位置づけ

Positioning of sports considered through sports broadcast time of public broadcasting

1K03B164-2

氏名 藤島幸輔

指導教員 主査 木村和彦 先生 副査 原田尚幸 先生

【緒言】

近年、スポーツビジネスが急速に成長し、注目を集めるようになってきた中で、わが国で53年前に放送を始めたテレビは、常にスポーツを取り上げ、プロ野球やプロレスのブームを呼び、一時代を築き上げた。最近ではそのプロ野球が不調にあえいでいるが、Jリーグの誕生や日本人選手のメジャー移籍、また様々な種目の台頭など、スポーツ界は更なる盛り上がりを見せ、メディアもそれに伴い、多様化の傾向をたどりながら、スポーツを大きなコンテンツのひとつとして、拡大し続けているように見える。本研究は、国内放送業界で唯一の公共放送であるNHKのスポーツ放送の現状について調査し、国民に対して説明責任があり中立でいなければならない同社が、いかにスポーツを捉え、放送しているのかを明らかにするものである。

【研究方法】

公共放送のスポーツ放送について調べるため、NHKの方に2度の面接調査を行い、データ依頼、放送・編成基準などのお話を伺うと同時に、スポーツ放送時間の年間推移を調べる。年代ごとの時代背景として、その年起きたスポーツ界のイベントやニュース、NHKの動向などを、年表形式で対比する。

【調査結果】

NHKの社内資料より、過去10年分のテレビ5波にラジオ第1を加えた6波におけるスポーツ総放送時間のデータをいただく事ができた。このデータをもとにNHK年鑑などの文献からNHK6波における年間総放送時間を算出し、スポーツ放送率を割り出し、それぞれをグラフに表した。

【考察】

NHKのスポーツ放送時間は、全放送における10パーセント強であることがわかった。放送試合数には偏りがあるものの、種目数は30を超え、競技スポーツをほぼ網羅していると言える。メガイイベントによってスポーツの注目度が高まると考え、その年にはスポーツ中継が多く組まれていることがわかった。逆に、現段階でメガスポーツイベントである3つが無い年が4年に1度現れ、筆者は「穴の年」と表現したのだが、この年にはこの10年間を見ても大きく落ち込んでいた。来年度2007年度も穴の年となるので、スポーツ放送時間、放送率の落ち込みが予想される。というように、メガスポーツイベントの開催が、その年のスポーツの盛り上がりの指針の一つになっていることは間違いないだろう。さらに、自国開催がきっかけでその後の同イベントの注目度が上がると考えられていることもわかった。

【結論】

最近のスポーツ中継についての流れでは、NHKがコンテンツを掘り起こし、育てたものを、民放が注目し取り上げ、更に拡大させていくという流れが増えている。民放が参入すると放映権料が高騰してしまい、NHKは手放さざるを得なくなる状況も少なくない。メガスポーツイベントに対してはNHKと日本民間放送連盟との間に立ち上がったジャパンコンソーシアム(JC)によって権料の急激な高騰に歯止めをかけたが、NHKが公共放送として、国民のニーズに応えるスポーツ放送を行うには、高騰する放映権料の問題解決が、今後必要不可欠な要因であろう。

